共にしあわせ産みだす日本共産党

市議団ニュース

第１８８５号
２０１８年８月５日
日本共産党根室市議団
根室市宝林町４－２０３
TEL ２３－６０２３
FAX ２４－１６８４

市政ウォッチングねむろ
「平和について考える戦跡めぐりコース」

７月２９日（日）に行われた市政ウォッチングねむろ「平和について考える戦跡めぐりコース」（根室市主催）に、日本共産党根室市議団の鈴木一彦議員が参加しました。

当日は好天のもと、約15名が参加しました。遠くは関西方面からの参加者もいらっしゃいました。

午前９時にバスで市役所前を出発、友知のトーチカ跡を車窓から眺め、少し戻って桂木の南部沼トーチカ跡に到着。

（二基のうち、比較的原形をとどめているトーチカ）

南部沼では、二基のトーチカを確認することができます。

根室半島のトーチカ群は、陸軍第33警備大隊長の大山柏の防衛構想によって作られたもの。トーチカなどの防衛拠点を整備し、敵の上陸を水際で防ぐ目的で、根室半島を半要塞化するという構想でした（当日の説明資料より）。

実際には上陸前に終戦を迎えたのですが、仮に敵が上陸したとして、これらトーチカ群で防衛できたかどうかは甚だ疑問です。

その後、牧の内旧海軍飛行場関連施設跡を視察。

根室第二（牧の内）飛行場は、千島列島・北海道防衛、アリューシャン列島の米軍への攻撃を目的に、昭和16年9月から海軍によって建設が進められました。

南北長さ約１２００m、幅約80mのコンクリート敷の滑走路とそれに直交するように東西長さ約１２００m、幅約１００mの滑走路の建設が予定されていましたが、東西滑走路は造成途中で放棄されました。

建設のため連れてこられた日本人、朝鮮人労務者は約３０００人にのぼる証言もあり、劣悪な環境下で労働を強いられました。現在でもコンクリート敷きの南北滑走路や掩体壕などの施設が残っています（前述資料）。

（有蓋の掩体壕。左端は説明者の猪熊樹人学芸員）

掩体壕（えんたいごう）とは、戦闘機を格納するために作られたものです。牧の内の飛行場には、有蓋（ゆうがい＝屋根あり）のものが20基、無蓋（むがい＝屋根なし）のものが22基作られたとのこと。しかし、牧の内飛行場では一度も飛行機が飛ぶことなく、終戦を迎えました。

バスはこの後、軍用貨車引込線（いわゆる「牧の内線」＝現在はほぼ道路になっている）跡などを通り、市街地へ。鳴海公園平和祈念碑を視察しました。参加者の中に、根室空襲当時、ちょうど（現在の）鳴海公園近くに住まわれていた方がいらっしゃって、当時の様子を語っていただきました。

それから図書館へ行き、根室空襲体験者のお話を聞きました。

お話してくださったのは佐藤敏子さん（81歳）。小学校入学前、５歳の時に戦争がはじまりました。戦争がひどくなっていくと、「防空演習」が頻繁に行われましたが、実際の空襲には役立たなかったそうです。

昭和20年7月14日、根室港では船が二艘、攻撃を受けて沈没。何体もの死体が海岸に流れ着いたのを目撃されたそうです。

そして、翌日の7月15日、朝、飛行機の音がして、日本の飛行機だと思って空を見上げたが、霧がかかっていてよく見えなかったとのこと。突然爆弾が落ちてきて、空襲だということがわかりました。

金刀比羅神社の方へ逃げましたが、そこも危なくなって、一家は徒歩で厚床まで避難したそうです。

佐藤さんは、「戦争は大変なこと。二度と経験したくない」とおっしゃっていました。参加者からも、「憲法問題など、いやな世の中になっている。体験者が伝えることが大事」との発言がありました。

戦争の悲惨さ愚かさ、平和の尊さを後世に伝えなければなりません。